南方の佛者

龍山章眞著

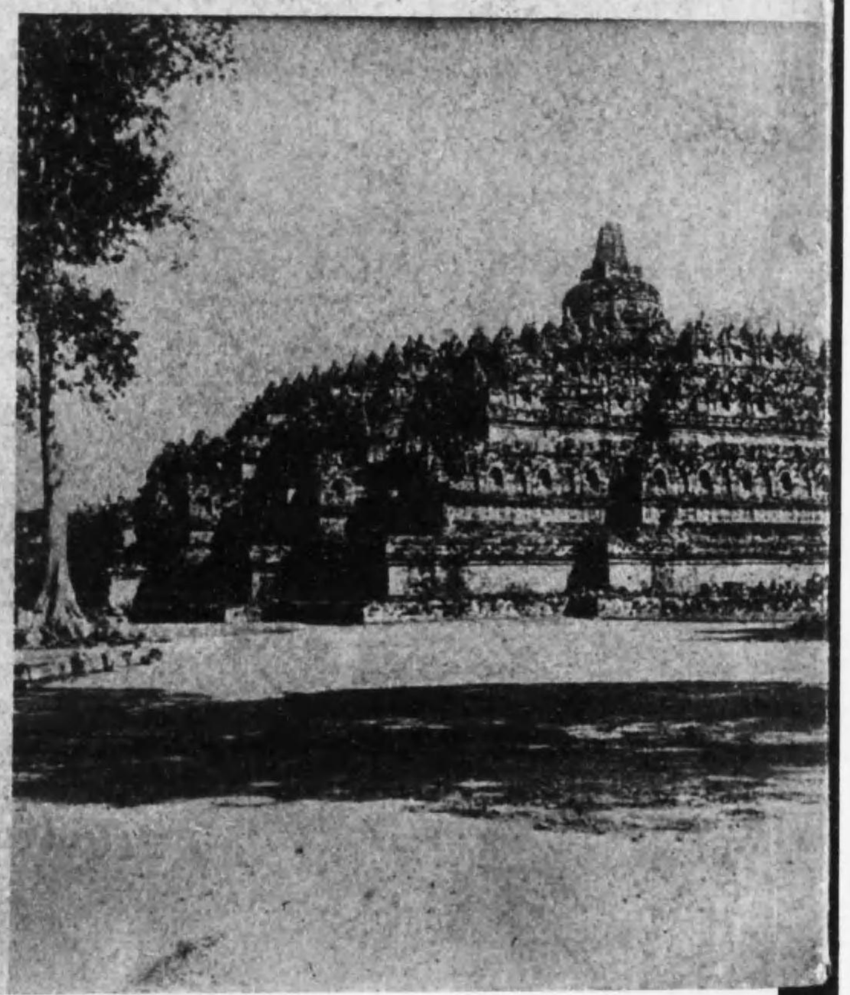
特253
613

始

特253
613

南方の佛教

龍山章眞著



東亞佛教圖册子 1

特253
613

龍山章眞著

南方の佛教

東亞佛教圖册子 I

大谷出版協會

目次

一　はしがき……一
二　東南アジアの宗教と佛教……三
三　クメエル王國の佛教……七
四　ジャヴ・スマトラの佛教……一二
五　安南の佛教……一九
六　南方上座部の佛教……二三
　——セイロン・ビルマ・タイ・カムボジャ・ラオス——
七　むすび……三〇

424

南方の佛教

一　はしがき

大東亞戰爭の開戰劈頭における日泰攻守同盟の締結は、まことに鮮かな東亞民族の一大宣言であつた。そしてその攻守同盟の歷史的調印式は、タイ國の首都バンコックの王宮寺院なるワット・プラケオにおいて、タイ國が誇りとするエメラルドの佛像の御前にて、いはば佛陀に誓つて、莊重に執行せられたと傳へられる。友邦佛敎國のタイにおける最も嚴肅なるこの佛前の調印式は、日本の佛敎徒に對して、深い感銘を與へずにはおかなかつたであらう。

また、日本のビルマ方面作戰の最高司令官は、ビルマへの進擊に際してのビルマ人への布告の中において、ビルマの住民が佛敎徒であり、佛敎徒としての自覺に立つて、東亞民族の使命達成に協力せんことを、感激的な文字をもつて呼びかけてゐる。そしてビルマ人はこの期待に

そむかず、いたるところにおいて皇軍の進撃に協力し、輝かしい戰果の獲得の一因をなしてゐる。さればこそ、日本の首相はビルマ人のビルマ建設を、議會において明確に約束したのである。この事實もまた、日本の佛教徒に對して、その自覺と奮起とをうながす、一つの重大なる契機となつたものと信ずる。

これらの二つの事實は、大東亞戰爭の遂行過程において、南方佛教への一般の關心を喚起し、ひいては日本佛教徒の役割を示唆する政治面の一・二の事例にほかならない。

日本の占領地域における住民の文化及び宗教に關して、これを如何に取扱ふべきかの根本的態度は、先きのフィリッピン及びジャヴの治安布告において明確に述べられてゐる。すなはち、日本の政治方針に反せざる限り、住民の在來の文化及び宗教は、これをそのままに許容し、或る面では更にこれを育成してゆく態度をとつてゐる。從つて軍事行動が一段落を告げた後において、南方佛教圈の諸國との文化面における工作及び提携に當つては、佛教といふ共通的な媒體を重用すべきことは言を俟たないところである。そしてこのためには、日本人の南方佛教に關する一般の知識水準が一層向上せられねばならない。かかる意味において、南方佛教の諸

形態について、ここにささやかな素描を簡潔に行ふこととした。更に南方佛教に關するやや詳しき叙述は、近く刊行せられる拙著「南方佛教の樣態」において、御覽願ひたい。

二　東南アジアの宗教と佛教

今や全く皇軍の武威に服したる東南アジアの廣汎なる地域は、宗教的に見る時、如何なる樣態を提示してゐるであらうか。いま地圖によつて大東亞の全域を鳥瞰する時、大體これを北部と中部と南部とに三大別されうるであらう。その中、北部はシベリヤ地方であり、中部は支那大陸地方を主とし、南部は印度支那半島と南海の諸島とを含むとみるべきであらう。そしてその中央部の東方洋上に、南北へその鵬翼をのばすべき日本列島が連つてゐる。さて東南アジア地方はこれを半島の部分と群島の部分とに二分することもできるし、また群島を更に二分して、全體を印度支那半島・フィリッピン群島・東印度諸島に三分することもできよう。いま現在の宗教的分布を主點として見る場合には、この三分された地域は、丁度三つの異なる文化的宗教の領域に合致する。「東南アジアの地政治學」の著者、クルト　ヴィールビツキーは、この地域

の宗教の分布は民族の傳播よりも統一ある姿態を示してゐる、（和譯十三頁）と述べてゐる。これらの地域の民族の分布は非常に複雜であるが、宗教の分布はそれに比して割合に簡單である。この際、動物崇拜や精靈崇拜の如き文化水準の低い民族の宗教形態は、問題として取上げられない。ここに問題となるのは、佛教と基督教と回教（イスラーム教）との文化的な三大宗教であつて、それらがあたかも上述の三つの地域に相ひ應じて、それぞれ流布されてゐる。この事實は我々の注意を強くひきつける興味深い現象である。

先づ佛教は主として印度支那半島の地域を占めてゐる。ここには西方から數へてビルマ・タイ・カムボジャ・ラオスといふ世界有數の佛教の繁榮地方がつらなり、ここにはセイロン佛教系統の南方上座部の佛教が行はれてゐる。更に東方には、その系統は異るも、同じく佛教の流れに屬する安南と東京との佛教地域が存在し、ここには支那佛教系統の混淆佛教が見られる。この半島から更に南へ延びるマレイ半島は、實際には群島方面との交流が多く、宗教的にも東印度諸島の領域に屬する。東印度諸島は現在においては、マレー半島とともに全住民の九割までが回教徒である。回教徒は更に上述の佛教圏の中にも混在し、フィリッピンでも西南部のモ

ロ族は回教に屬してゐる。第三にフィリッピン群島は、大體基督教の舊教（カトリック教）に屬する者が、全住民の九割を占めてゐる。基督教徒は他の地域にも分散し、印度支那半島の方面にも住してゐる。

右に述べた三つの宗教圏の分ち方は、現在の宗教的分布の實情に從つて、概括的にこれを行つたにすぎない。しかし宗教上の傳播は常に變動するものであつて、これが不變の樣態ではない。現に東印度諸島へ回教が傳播せられたのは、僅かに五百年位以前からにすぎない。またフィリッピン群島へ基督教が傳へられたのは、更に新しくスペイン領の時代からであつて、僅か三百年を出でないであらう。これに反して佛教は、東印度諸島中のジャヴ・スマトラ及びマレイ半島において、歴史上にその廣汎なる傳播の跡を見ることができる。かくの如く各宗教の現在的圏域と歴史的圏域とは交叉しあつてゐるが、その中もつとも中心となるものはいふまでもなく佛教である。ゆゑにここに佛教に就いて、更にその地域的並びに内容的區分を述べなければならない。

今日の南方佛教と呼稱される概念のなかに、いかなる地域のいかなる佛教を含むと見るべき

であらうか。これに就いてはいろいろの見方・說方がありうるであらうが、私見に從へば、大體次の四つの樣態に分ちうると考へる。

ここに南方佛教の四つの樣態といふは、第一にはセイロン・ビルマ・タイ・カムボジャ・ラオスの各地域に現行するところの「南方上座部」の佛教である。第二には印度支那半島の東南沿岸地方なる安南の地域に現行するところの、佛・儒・道の三教が混淆したる混成的佛教である。これらの二種の佛教は、いづれも現在その地域の住民の精神と生活とを支配してゐる。從つてこれらは、南方への宗教工作の對象となるべきものである。

第三には印度支那半島の中央部、すなはちカムボジャ地方を中心とし、タイ・ラオス及び安南南部の地域にわたつて、過去の或る時代に數百年の間流傳されたところの、クメエル王國の佛教である。第四にはジャヴ・スマトラ及びマレイ半島などの地域において、同じく過去の或る時代に信奉された佛教であり、いはゆる南海佛教と呼ばれるものである。これらの二種の佛教は、いはば歷史上の佛教であり、しかも印度教のシヴ派・非シュヌ派などと混淆し融和した變態的な佛教であつて、廣い意味で印度的宗教とも稱すべき內容を有してゐる。これらの佛

教は、現在ではそれらの佛教文化の遺品・遺跡を留めてゐるのみで、宗教としては行はれてゐない。ただジャヴ佛教の殘影が、その東方に接するバリ島に遺つてゐるが、これも實は印度教と稱する方が適當であらう。

印度本土の宗教事情については、ここには觸れなかつた。印度本土は南アジアの中心體をなす重要な地域であり、宗教的にみればきはめて複雜なる樣態を提示してゐる。住民の六割八分は印度教の諸宗派に屬し、二割二分は回教徒であり、殘りの一割の中に、ジャイナ教・シーク教その他の諸宗教が含まれる。しかし東南アジアの地域を取扱ふこの小册子中には、印度の宗教事情を述べる餘裕がなく、他の機會にゆづりたい。ただ印度における佛教復興の運動については、この書の「むすび」において一瞥する筈である。

三　クメエル王國の佛教

クメエル民族は、きはめて古い時代に北方から移り來つて、カムボジャを中心とする地方に定住してゐた。クメエルとは、カムボジャ人が自らを呼ぶ土着の言葉である。すでに西紀第三

世紀（約千七百年前）において、この民族は印度支那半島の南端部に扶南と呼ぶ王國を建て、その北方のカムボジャ地方には眞臘といふ王國を有してゐた。これらの王國は印度と交通關係を開き、その文化や宗教をも傳來せしめてゐた。彼等の統治者も印度系の種族に屬してゐた。他面には支那との交易をも行ひ、支那朝廷への朝貢の記錄も殘してゐる。概括的に見れば、一面に藝術・宗教・文學などは印度文化の指導下に立ち、他面に商業・產物その他の物質的方面は支那民族からの影響をうけてゐたといへよう。

その後、幾回かの王朝の變遷を見るのであるが、西紀八〇二年（皇紀一四六二年）にいたつて、確固たるクメエルの王朝が創められ、それが約五百年間の繁榮時代を出現せしめた。この五百年間において、クメエル民族は特有なる宗教文化を產み出し、一時はこの半島の大部分を統治下に置き、彼等が西方のタイ族のためにその首都を逐はれた後にも、その驚くべき文化的遺跡を殘したのである。

クメエル文化は、要約的にいへば、印度的宗教文化であり、しかもその宗教は王者を中心とする宮廷宗教であり、これを樣態的に見れば建築や祭禮を主とする形式宗教であつた。從つて

一般民衆には汎く浸透してゐなかつたから、タイ族の侵入以後はその强制にもよるが、カムボジャの一般民衆は容易に巴利佛教の信奉者となり、現在に及んでゐる。そして印度的混淆宗教は、僅かに宮廷の儀禮として、現在プノム・ペンの王宮に昔の面影を傳へてゐるにすぎない。

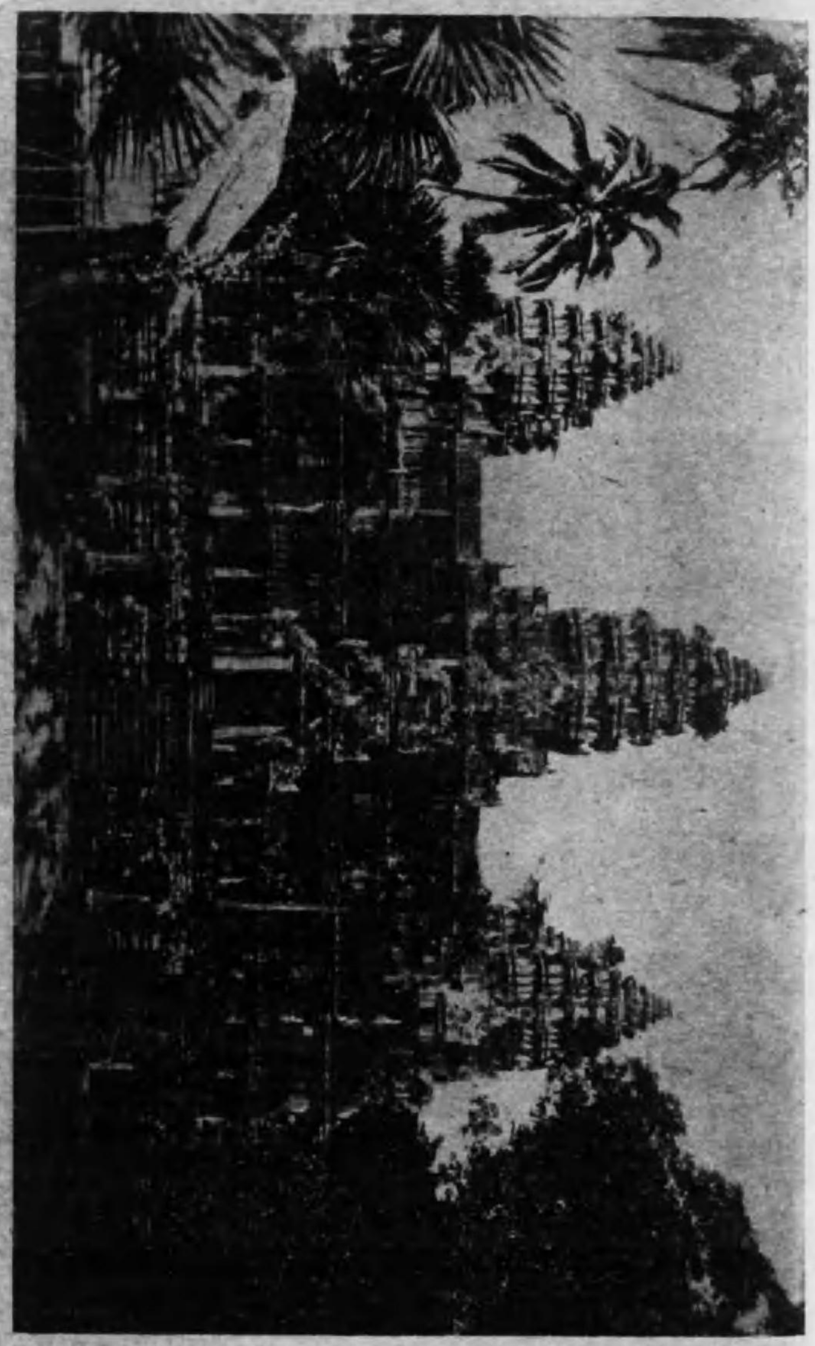
クメエル王朝の諸王は、多くは印度教のシヴ派或ひはヰシュヌ派の信奉者であつた。そしてその中のスールヤヴルマン一世（西紀一〇〇二―一〇四九　皇紀一六六二―一七〇九）とジャヤヴルマン七世（西紀一一一二―一一五二　皇紀一七七二―一八一二）との二人が、自ら佛教を信奉することを述べてゐるにすぎない。しかしクメエル人にとつては、印度教と佛教との區別は嚴密ではなく、いづれも印度的宗教として融和的に考へられてゐた。現にその寺院建築においても、兩者を區別すべき根本的相違は見出されず、わづかにその中に安置する神像が異つてゐたにすぎない。惟ふに彼等には、佛教も、いはば印度宗教の一派たるにほかならなかつた。

このクメエル王國の首都は、カムボジャの北部地方に西紀第九世紀末（約千餘年前）に建設せられ、これをヤショダラ城と呼んだが、後にアンコオル・トオムと稱するやうになつた。この王城は正方形をなし、四方を高い石壁で圍み、四邊の中央に各々高い石門を設け、四門をつな

ぐ十字路の交叉する中心點に、王城守護のバヨン寺が建立されてゐる。この寺院ははじめ觀世音を本尊とする佛教寺院であつたが、後にシヴ派の寺院に變更せられ、本尊もシヴ神を象徴する性標（リンガ）に置かへられた。この寺は中央に巨石をつみあげた山形の大塔があり、その周圍にも四十數箇の大塔が聳え立つてをり、その各々の塔の頂上に、四方に向つて四面の大きな顔が刻まれてゐる。その眺望はまことに怪奇にして雄大なるものである。これらの四面の顔は、或は梵天ともいはれ、或はシヴ神を表はす性標（リンガ）とも解せられたが、實は觀世音菩薩の面相を表はしたものと見らるべきである。バヨン寺にはまた多くの浮彫が殘されてゐる。

バヨン寺の北方に王宮の廢趾があり、その前方に勝利の道といはれる大道が通じ、これは勝利の門を通つて城外に延びてゐる。勝利の道の傍らに、幾十の巨人像が七頭の大蛇を引張つてゐるのも、怪奇なる情景である。

さて、このアンコオル・トオムの王城の廢墟から、南方約一キロを隔てて、アンコオル・ワットの遺跡が存在する。ワットとは寺院の意味であり、アンコオル・ワットはすなはち、アンコオル寺である。この寺院は西紀第十二世紀（約八百年前）の半頃に建立せられ、并シュヌ神に



アンコール・ワットの遺跡

ボロブドゥル大塔廻廊の一部

捧げられてゐる。クメエル藝術史の上では、この寺院の建築は第二期の後期に屬するが、それだけにその構造は複雜であり、規模は雄大であり、裝飾彫刻はきはめて巧緻である。

アンコオル・ワットは西面して設けられ、その構造は、中心に本殿が建てられ、その周圍に三重の廻廊が遶らされ、廻廊をつなぐ廊下が設けられ、廻廊は外部から第一・第二・第三と數へられるが、第一廻廊の壁面には、五十メートル乃至六十五メートルの、八組の浮彫が繪卷風に施されてゐる。この彫刻はごく薄肉の浮彫であつて、それらの主題は印度の詩譚たるマハーバーラタ及びラーマーヤナなどから取材されてゐる。いづれもきはめて人物の多い特殊な構圖であつて、いろいろの戰爭の場面が多く描かれ、ヰシュヌ神を中心としてゐるが、詳細についてはここに述べつくしがたい。

第一廻廊の周圍は草地であつて、その外に四方を圍む石の壁が遶らされてゐる。更にその外側に幅二百メートル位の外濠が周圍をとりまく。いはばこの寺院全體が、一つの城廓を形造つてゐるといへよう。(圖版第一參照)

このアンコオルの地には、これらの外にも種々の神殿などの遺跡が存するが、主なるものは

上述の二點である。タイ族の劫略によつてクメエル王朝が南方へ逃れた後、數百年に亙つて、この首都と寺院とは、熱帶の密林の蓋ふにまかされ、土地の住民の間にわづかに怪奇の神殿として語りつがれてゐたにすぎなかつた。それがフランスの探險家によつて八十年程前に發見せられ、その密林中の幻想的な存在と異國風の藝術とが相俟つて、西歐の住民の好奇心に投じたのである。そして彼等の懸命の復舊の努力によつて、漸く遺跡としての全貌が明らかにせられるにいたつた。現在ではアンコオルの遺跡群を巡廻する自動車道路も設けられ、附近一帶は公園地域に指定せられ、優れた案内書や寫眞集なども出版せられてゐる。

四　ジャヴ・スマトラの佛教

元來ジャヴ島とスマトラ島との區別は、きはめて古い時代には明確に知られてゐなかつた。そして兩者を合した陸地をヤヴといふ名で呼んでゐたとみられる。このヤヴの地は、印度の東部及び南部の沿岸地方との間に、きはめて古くから交易の關係が行はれ、また印度からこの地への移民も行はれてゐた。從つて彼等は印度本國の文化をこの地へもたらし、その言語・宗教風俗・藝術なども自ら傳來せられた。そしてその主長たる者が沿岸王國を建設したが、その最も早きものは西紀第五世紀（約千五百年前）の頃から、南部スマトラ地方と中部ジャヴ地方とに存在してゐた。殊にスマトラのシュリー非ジャヤ（室利佛逝、今のパレムバン地方）に建立された王國は、大乘佛教を信奉し、時に王朝は變更されたけれども、約千年の長きに亙つてこの地に都してゐる。他面に中部ジャヴではシャイレンドラと名づける王朝が勢威を得て、大乘佛教を厚く信奉してゐた。西紀第九世紀頃にいたつてこの王朝が二分し、中部ジャヴとスマトラのシュリー非ジャヤとに各別の王朝を立てるやうになつた。このシャイレンドラ王朝の發祥の地がいづこであるか、そしてそれとシュリー非ジャヤとの關係がいかなるものであつたかは、現在の研究段階では未だ不明確であり、且つ論議の存するところであるが、今、大體その發祥の地は南印度にして、はじめ中部ジャヴにその王朝が建設せられ、後にシュリー非ジャヤと二分したるものとなす說に從つた。そして中部ジャヴのシャイレンドラ王朝が、その後間もなく滅亡したのに反し、シュリー非ジャヤのシャイレンドラ王朝は目覺ましい繁榮時代を實現し、數百年間に亙つて、スマトラ島・ジャヴ島西部・マレイ半島中南部などをその統治下におき、現在

のマラッカ海峡の兩岸を扼し、印度と支那との中間交易場としての地理的好條件によつて、その富强を誇つてゐたのである。

このシャイレンドラ王朝は、厚く大乘佛敎と信奉したから、中部ジャヴ及びスマトラ・マレイ半島の地に、大乘佛敎がひろく傳播せられた。そしてその王朝の豐かなる財力と、專制的王者の使用しうる無限の勞働力とによつて、各地に莊大なる寺塔の建立を見たのである。その中特に著名なものは、中部ジャヴにその雄大を誇るボロブドゥルの大塔である。その後中部ジャヴの王國は突然にその消息を斷つてゐるが、それは恐らく火山の噴火か疫病の流行などの爲であらうといはれる。そして彼等の建立した寺塔のみが、今なほ高原の地に聳え立ち、徒らに王者の夢を語りつづけてゐる。

その後東部ジャヴ地方に、新しくジャヴ人のマジャパヒト王國が建設せられ、西紀第十三世紀から第十五世紀まで存續したが、遂に西方から侵入し來つた回敎徒の爲に滅亡せしめられた。このマジャパヒト王朝は、純粹にジャヴ特有の文化の華を開いた時代であり、その文學・美術・音樂・演劇などの藝術文化の方面にも、優れた作品を產み出してゐるが、宗敎的には大體印度敎のシヴ派・并シュヌ派が主流をなし、密敎的大乘佛敎も並んで行はれた。しかしその佛敎は印度敎と混和融合したものであつて、矢張りここでも廣い意味の印度宗敎の一派の如く見做されてゐた。それ故に印度敎のシヴ神も佛敎の佛陀も、ともに最高實在の異る表現法に外ならぬと考へられ、また印度敎の梵天・ヴシュヌ・シヴの三位一體の思想を、直ちに佛敎に當はめて考へることも行はれてゐた。かかる考へ方に基いて、佛敎の精舍も印度敎の寺院も、その建築樣式は全く同一とせられ、わづかにその中に祀る尊像によつて、區別せられた。更に進んでは、同一寺院內の一面には佛敎の佛・菩薩の像を安置し、他の一面にはシヴ・ガネエシャ・并シュヌなどの像を祀つて、何等の矛盾をも感じないやうである。ここに全く特殊なジャヴ佛敎の樣態を眺めうると思ふ。

この王朝の滅亡に際して、難を東方のバリ島に避けた人々は、その後この島に安住地を見出して現在に及んでゐる。それ故に現在この島には、佛敎の觀念を幾分か加味した特殊な印度宗敎が、一般に流布されてゐる。

南海佛敎の諸遺跡の中において、斷然他を壓して特筆すべきは、かのボロブドゥルの大塔で

ある。これは實に、世界の七不思議の一つともいはれるほどの名物であるから、ここに少しくその面影を描き出してみよう。

ボロブドゥルは、中部ジャヴのケドゥ州にある小山の上に建立されてゐる。そこからは廣々とした平野が見渡される廣闊なる山の上である。ボロブドゥルといふ名は、恐らく梵語から轉訛された言葉で、「最勝の佛陀」といふ意味をあらはす。その建設年代は普通西紀八五〇年頃（約千百年前）といはれてゐる。

この塔の大體の構造は、現在の基壇において正方形に近く、一邊の長さ百十一メートル（約一町）であり、その上に同形の五層の廻廊と、三重の圓壇とを積上げてゐる。全部粗い目の切石からなり、規模の雄大なることは、かのエジプトのピラミッドにも比せられるであらう。しかしその高さは三十三メートルにして、廣さの割合に餘り高くないから、全體としての偉觀を殺減してゐるといはれる。

この大塔には印度教的色彩は少しも見られず、全く密教的大乘佛教の觀念に基いて構成せられてゐる。普通に呼びなす如く、この大建築は佛教の塔（ストゥーパ）であるには相違なく、その上方の三重の圓壇から上はまさしく塔の要素をそなへてゐる。頂上には中央に大塔があり、周圍に小塔七十二を數へる。しかしその下方の五層の基壇部には、第四層迄には四方に向つて曼荼羅の四佛を安置し、第五層には中央佛を安置する點などから見て、曼荼羅としての意味が加へられてゐることを見逃してはならない。さらにこの塔はその附近にあるムンドゥ寺とパヂン寺とともに、この高原の全體を占めて構成される一大伽藍の一部であつて、その雄大なる構想にはまことに驚嘆せざるをえない。そしてその中のボロブドゥルは、塔中に塔を設けるきはめて複雜なる構造であつて、印度本土にもその類例を見ざる異數の建築である。

ボロブドゥルの名を高からしめたのは、ただにその雄大なる建築のみによるのではない。實にその廻廊に施されたきはめて多數の浮彫圖繪によるのである。浮彫の主題は、釋尊の生涯、釋尊の前生物語、諸弟子の物語、華嚴經の物語、彌勒その他の菩薩の物語などであつて、それらが廻廊の壁面に繪卷風に浮彫されてゐる。第一層からはじめて中央の大塔を右遶しつつ廻廊を進めば、順序を追つてその主題が展開されるやうになつてゐる。その浮彫の分量は全く驚く外はなく、延長實に二里に近いといはれる。浮彫の構圖は千差萬別であり、人物の配列が非常

に多く、少しく混雜の感じを與へる。しかしすべてその容貌が南國的で明るく、しかも愛嬌があつてユーモラスである。大塔全體の風貌は重々しく感じられるが、この浮彫の雰圍氣は輕やかである。特に釋尊傳の部分は著名であり、大體成道後の說法を以てをはつてゐるが、その一一の狀景の順序は、梵文の「遊戲廣說（ラリタ・ヴィスタラ）」とよく合致するとのことである。しかし更に西藏譯・漢譯の各種の佛傳などを驅使して、その研究を完成すべきは、我我日本佛敎徒の任務である。

（圖版第二參照）

ボロブドゥルと同一伽藍の一部に屬するとみられるムンドゥ寺には、ジャヴ美術の第一ともいふべき優れた尊像がある。これは高さ十四尺餘の阿彌陀佛の倚像を中心に、兩側に觀世音と文殊師利との倚像を安置し、いはば彌陀三尊佛である。黑味がちの堅い石に刻まれ、磨きがかけてあるから、きはめて優美高雅である。

東部ジャヴの佛敎遺跡も二・三殘つてゐるが、その規模においても、美的價値においても、中部のものには及ばない。建築としてはジャゴ寺が最も宏莊であるが、佛敎建築としての特徵はなく、印度敎寺院とえらぶところがない。彫刻としては、シンガサリ寺の文殊師利の像や、

ボロブドゥル大塔迴廊の浮彫

イーナー夫人、ルムビニーの園へ赴き給ふ圖（佛傳）

村頭スジャータ、太子に乳糜を供養し奉る圖（佛傳）

ボロブドゥル大塔圓廊浮彫

シッダルタ太子弓技を競ふ圖（佛像）

五比丘講座の圖（佛像）

その附近のパボー寺から出た般若波羅蜜多菩薩すなはち智慧の女神の像などが、その名を知られてゐる。殊に後者は女性の優美さを巧みに表現した名作である。またマジャパヒト王朝の首都は、回教徒によつて破壞されつくしたために、この地には寺院の遺跡は殘つてゐない。

五　安南の佛教

上來主として歴史上の佛教に就いて述べてきたが、今私は現行の南方佛教へ眼を轉じなければならない。

佛教の四つの樣態の中、先づ第三と第四とを終つて、第二の安南佛教に就いて述べることとなつた。安南佛教は現在印度支那半島の東沿岸地方に行はれ、東京・安南の兩省を中心とする。そして現在の行政上の區分が宗教分布上にも全く一致し、その西側地域なるラオス・カムボジャ地方には、タイと同樣の南方上座部の佛教が現行されてゐる。安南佛教の歴史は、未だその研究の緒についたばかりの狀態で、詳細なる點は不明であるが、歴史上大體これを左の如く三期に分つことができよう。

第一期　移入期　西紀第二世紀――第十世紀前半。佛教は主として北方の支那から移入せられ、僧徒の來往も見られるが、未だ盛大には至らなかつた。

第二期　開華期　西紀第十世紀後半――第十四世紀。主として李朝と陳朝との佛教保護政策によつて、佛教は國教として採用せられ、諸皇帝は禪位後に出家して禪門に入り、寺院の建立、僧尼の養成、布施や大赦の行事など、佛教はきはめて繁榮せる黃金時代を出現せしめた。そしてこの期間における佛教は、主として禪宗の諸派であつた。

第三期　後退期　西紀第十五世紀――現在。先づ黎朝においては支那の文物制度を採用し、併せて佛教をも用ゐたが、その結果儒・道・佛の三教の混淆融合を將來した。次の阮朝では朝廷の制度には儒教を採用し、佛教は民間の信仰たるにすぎなくなり、儒道二教との混淆もその度を進めた。

さて安南佛教の現狀に就いては、これは一種特有の混成宗教と見做さねばならない。すなはち、前述の儒・道・佛の三教が混淆したる上に、更にそこへ農村における部落の守護神の信仰も加味せられ、民衆はそれらの區別を殆ど知らない。この複雜なる形態を、それぞれの最初の要素に還元せんとする試みは、事實上あまり意味がなく、むしろかかる一つの特殊な佛教形態として取扱ふべきであらう。

今ここに、その實際上の狀態を眺めることとしよう。寺院の建築樣式は大體支那的であり、その本堂には民間の信仰を反映して各種の尊像が併せならべられてゐる。その安置の順位などは非常に區區(まちまち)であるが、大體佛教では阿彌陀佛・釋迦牟尼佛をはじめ、觀音菩薩・彌勒菩薩・文殊菩薩などを安置し、その他では孔子・老子の像や冥府の王・諸の宿星などを据えてゐる。また羅漢や道教の神神の圖や、梁間には地獄の圖なども多く描かれてゐる。

佛教的觀念としてもつとも廣く行はれてゐるのは、靈魂の輪廻說である。諸佛はこの世界の上方に在すとなし、この世界を監視してゐると考へられ、天上には更に佛教守護の諸天もゐると信じられてゐる。

佛教行事として一般に行はれるものは、我國の盂蘭盆會にあたる七月十五日の儀式である。この日は、いはゆる地獄も開く日であつて、祖先の靈がこの世へ來ると信じられ、これに供養をなして盛な法要を行ふ。各戸の門前に食物や衣服や金錢などを並べ、夜がくるとすべてそれ

らを燒く。かくしてそれらの供物は、祖先のもとへ屆くと考へられてゐる。

安南人は現在きはめて無氣力であるといはれる。これは佛印政府の植民政策にもよるであらうが、更に古來の混淆宗教によつて信仰が不統一なるがためでもあらう。それゆゑに民族意識に根ざす純粹なる宗教信仰を喚びさますことが、安南人をして活氣あらしめる重要なる素因と考へられる。かの高臺教の如きも、佛教と道教とキリスト教とを混淆したものであつて、果して安南民族の宗教としてかかる要望に副ひうるか否かは、急速には豫斷しがたい。

六　南方上座部の佛教

さて、ここに南方佛教の中で最も中心をなす南方上座部の佛教に就いて述べる順序となつた。南方上座部の佛教の根據地はセイロン島であつたが、同地の佛教は外敵の侵入などのために全滅した時代もあり、後にビルマから逆輸入するやうな現象もおこつてゐる。しかしビルマ及びタイの佛教は、それぞれセイロン島から迎えられ、中絶することなく現在にいたつてゐる。更にラオス・カムボジャの地域では、タイ族がこの地方を征服した時代にタイ族から傳へられ、

同地にあつた古いクメエルの混成的佛教を驅逐して、清新な南方上座部の佛教が民衆に信奉せられるやうになつた。かくして、南方上座部の系統の佛教は、現在セイロン・ビルマ・タイ・カムボジャ・ラオスに亘る廣大な地域に分布し、しかも民衆の宗教として、數千萬の民衆の精神と生活とを支配してゐる。

これらの地域における佛教徒の數を見るに、セイロンでは總人口四百五十萬の六割を占めるセイロン原住民（シンハリースともいふ）はすべて佛教徒である。ビルマでは總人口一千六百萬の中、少數の未開民族を除いて約八割を占めるビルマ人はすべて佛教徒である。次にタイでは總人口一千八百萬の中、僅かに南方のマレイ半島地方に住する回教徒を除き、實に九割五分が佛教徒である。同國では王室の宗教は佛教であり、今から十年前に制定せられた新憲法には、皇帝は佛教の信者にして宗教の擁護者たるべきことを明記し、佛教の行事はそのまま國家の行事として採用されてゐる。その東のカムボジャ・ラオス地方は總人口の七・八割が佛教徒であり、この佛印の西半地域は、種族的にも宗教的にもタイ民族と相ひ近いから、タイが大タイ主義を唱へて、これらの地域をその統治下におかんとする要求も、故なきものではない。

これらの地域の南方上座部佛教は、その所依の聖典が共通してパーリ語である點からパーリ佛教とも呼ばれる。尤も同じパーリ語の聖典でも、セイロンではセイロン文字、ビルマではビルマ文字、タイではタイ文字、カムボジャなどではカムボジャ文字で書かれてゐるが、それは音標記號たる文字が異るのみで、言語としては同一である。またこれらの地域の佛教は、時に我國の人人によつて小乘佛教とも呼ばれるが、この呼び方は彼等によつて喜ばれないし、その言葉の含む蔑視的な意味を考へて、こちらから差控へるべきであらう。そして南方上座部佛教といふ呼び方を用ふべきであらう。同じく南方上座部といつても、國國によつて慣習・行事及び寺塔の形態などに幾分の相違があるが、戒律や教義などの主要なる點においては同一である。

元來上座部といふは、釋尊の滅後百餘年にして、佛教教團が上座部と大衆部とに分裂した時、大衆部の系統は進歩的であつたのに對し、上座部の系統は保守的であつた。上座といふは教團の主腦者を意味する言葉で、上座部といふは教團の正統派たることを自負する誇りを表はしてゐる。その上座部の系統は、西紀前第三世紀の半頃(約二千二百年前)、かの阿育王が佛教による正法の政治を行つてゐた時代に、王の派遣した傳道師によつて、セイロンへ傳來せられた。その傳道師は實に阿育王の王子マヒンダであり、後に王女のサンガミッターも比丘尼としてセイロンへ赴いてゐる。ここにも阿育王が佛教宣布にいかに力を用ゐたかを知りうるであらう。このセイロンの佛教は、その後教理上に著しい變化をうけないままに、ビルマ及びタイなどへ傳へられ、以て今日に及んだのである。

この南方上座部の歴史によつて判るやうに、この佛教は、その發展の過程において、北方佛教に見る如きはげしい思想闘爭を經驗してゐない。いはば素朴にして清新なる狀態のままに傳持せられてきた。かの北方の大乘佛教は、印度においてすでに婆羅門教の哲學との劇しい論戰を經驗し、支那へ來つては道教及び儒教と對立し、或點では融和し、日本へ來つても眞の日本佛教が產れ出づるためには、深刻なる思想闘爭を行つてゐる。その結果、思想的には非常に高遠にしてしかも實踐的な教理が產み出されたのである。これに對比する時、南方上座部の佛教は原始的な樣態をそのままに今日に傳へ、一面においては簡明にして清新ではあるが、一面においては思想が消化せられてゐず、生のままの點が見られる。

飜つて現在の寺院の模樣を見るに、これらの地域には、いたる處立派な精舍や塔が建立されてゐる。殊に塔はその數も多く、建築も優れてゐる。ビルマでは塔をパゴオダと呼び、ラングーンのシュウェ・ダゴン・パゴオダをはじめ、マンダレーの四百五十塔など、國内に充滿してゐる。ビルマをパゴオダの國といふ所以である。ビルマ人は資産の許すかぎり、一生に一個のパゴオダを造ることを念願としてゐる。その形は尖頭形で、金箔を張つてこれを飾る。寺院境内へはいかなる王侯も靴をはいたままでは入れない。曾て英國の殿下のラングーン訪問の際、パゴオダの石段を靴のままで登らんとするや、案内者は皇帝の前に立ちふさがり、たとひ殿下たりとも靴を脱がれぬ以上、パゴオダの聖域に入れることは出來ないと叫んだ。殿下は憤然石段を蹴つて歸つてしまつたといふ挿話もある。それほどに、ビルマ人が寺院やパゴオダに對する尊敬は絶大である。タイでもバンコックをはじめ、各地に寺塔が聳え、王室寺院のワット・プラケオや、メナム河畔のワット・チェーンなど、きはめて莊麗にして雄大である。タイの塔には尖頭形の外に、更に砲彈形のものも見られる。

タイにおける佛教行事の重なるものは、安居と布薩とエーサックとである。安居（あんご）といふは雨期の三箇月間、出家は托鉢に出でず、特に寺院内に留つて專ら勉學に努める期間である。タイとビルマとでは、男子は必ず一度は寺院へ入り、少くも三箇月の安居をそこで送ることとなつてゐる。この制度はいはば一種の青年訓練所であり、バンコックにはかかる青年を收容する寺院も數箇所あつて、佛教の智識を學ぶと同時に、宗教的訓練を施される。

さて安居には入安居の儀式と出安居の儀式があるが、それらはタイでは國家的行事として執行される。すなはち、皇帝が王室寺院へ參詣して佛前に蠟燭を點し、諸の百官もこれに倣ひ、民間においても勿論この儀式を行ふ。安居中には、在家は特に布施物を寺院へ運んで供養をなし、出安居の際にも盛大な儀式を行ふ。皇帝自ら王室寺院において福德衣を出家に供養し、併せて佛教歸依の表明をせられるのである。一般の人人も三衣を供養して儀式を行ふ。

次の布薩（ふさつ）の儀式は、主として出家のみに關する。毎月滿月と新月との日に、同一區域に住する出家が集つて、比丘の戒本すなはち二百二十七條よりなる生活の規則を讀み、これを聞きながら各自が反省し、懺悔する儀式である。これは南方上座部の戒律精神の最も重要なる訓練樣式である。

次にヱーサックといふは月の名であつて、大體太陽曆の五月にあたる。そのヱーサックの滿月の日に行はれるのが、ヱーサックの祭禮である。これは釋尊の降誕と成道と入滅とが同じ月日の日におこつたので、一度に合せて三日間の國家的行事を行ひ、學校官廳なども休みとなり、國を擧げてこの式典を營むのである。皇帝は王室寺院へ參拜し、高僧の法話を聽聞せられ、一般の民衆もそれぞれ拜禮をなし、釋尊の傳記を讀むことにつとめる。

さて最後に當つて、南方上座部の佛教精神はそもそもいかなるものであるか、といふ點を簡單に考へよう。先づ出家に就いて見れば、彼等は戒律遵守を以て最も重要なる中心と考へる。この戒律精神は、それが眞に內面の宗教的要求に基くものであるならば、誠に尊重すべきである。しかし實際には、多くは形式に墮し、その條規の遵守に汲々たる狀態では、佛教精神の顯現として甚だ頼りないであらう。そして徒らに條規の末にこだはつて、例へば僧侶は金錢に手を觸れてはならぬとか、外出には必ず四人以上でなければならぬとか、また食事は必ず正午以前にとらなければならぬとか、かかる末節に拘泥してゐるきらひがある。これは戒律精神の正しい把握法とは見られず、かの大乘佛教の內面化された戒律思想と比較する時、思想的に甚だ幼稚といはざるをえない。更にこの條規過重の態度は、宗教と實生活とを二元的に考へしめ、實生活から遊離した寺院生活を强制することとなつてゐる。出家は多く國民學校の教師の如き役割をなしてゐるが、本當の教育制度に基くものではない。この二元的な態度はタイ佛教の戒律精神に就いて大いに檢討を要する點である。惟ふに、日本佛教における生活の中に佛教を生かす態度が、これを救ふ道ではなからうか。

次に在家の人人に就いて見るに、彼等は寺塔の建立と出家への供養とを以て、彼等の宗教的行爲の大部分と考へてゐる。そしてこれらの供養はすべて自己の功德を求める意味においてなされる。甚しきはいかなる果報をうるためにはいかなる供養をすべきかを規定した本さへあるといふ。かくては供養は一種の功利的な商賣に外ならないこととなる。かかる低い布施供養を轉換して、廣く社會の福利のために公共事業を行ふことも必要であり、更に一層根本的には、報恩の思想に基く布施供養を行ふやうに導かねばならぬ。この報恩の思想こそ、日本の大乘佛教の優れた實踐面であつて、これを何らかの形に消化して南方佛教徒へ贈ることは、日本佛教徒の役目であり、同時に喜びであらねばならない。

七むすび

南方の佛教といふ題名の下に、東南アジアの地域における、歴史上並びに現行の佛教の四つの樣態について、簡單なる叙述をなしをはつた。今やここに問題となるは印度である。しかし印度本土では、佛教は約七百年前に滅亡し、今日宗團の形における佛教は行はれてゐない。現在印度教の中に、佛教が變形せられて流れてゐるものもあるが、それは別の問題である。しかし二三十年來、佛教の復興運動が印度の各地におこり、その中大菩提協會の運動は相當の成功を收め、釋尊の初説法の地サールナートには、佛教寺院の建立を見てゐる。しかし宗教の復興には、百を以て數へる年數を考へねばならぬとは、印度の佛教運動者の言である。我々日本佛教徒は、佛日が再び印度に輝く日が、印度人の印度が確立される日に引續くことを切に念願してやまない。

（昭和一七・三・二六）

424
102

昭和十七年四月十七日印刷
昭和十七年四月廿二日發行

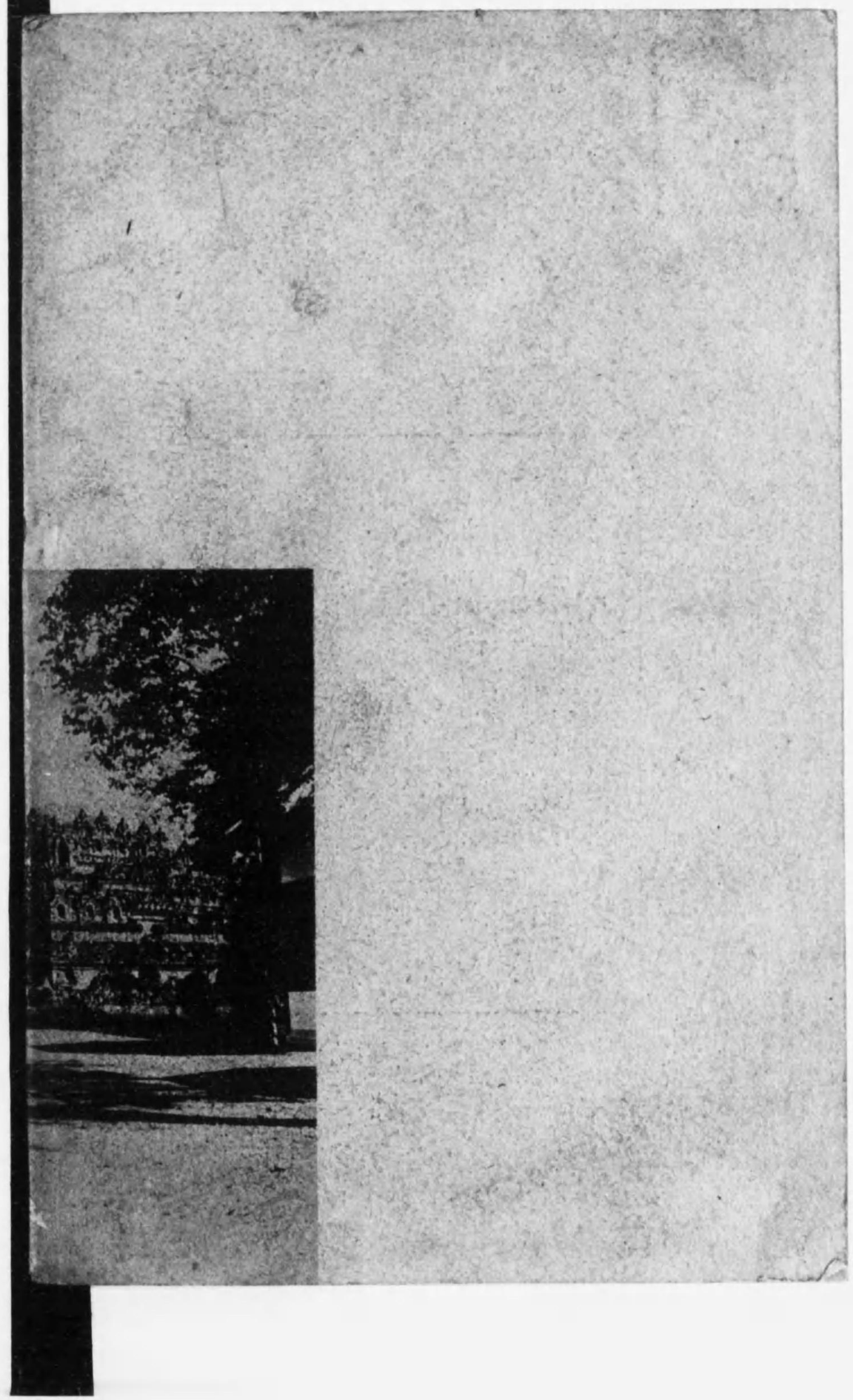
非賣品

著者　京都市下京區常葉町　龍山章眞
眞宗大谷派宗務所教學局

發行者　京都市下京區北小路新町西入　清水洪

印刷者　京都市下京區西洞院通七條南入　須磨勘兵衛

印刷所　內外出版印刷株式會社

京都市下京區常葉町眞宗大谷派宗務所內
發行所　大谷出版協會

終